

評論文学習での、概念語と「論理」への注目

―観念実在・二項対立を中心に―

長野県松本美須ヶ丘高等学校 齋 修

一 はじめに

新学習指導要領の評価基準では、ある概念を表す言葉の意味について知っていることは、知識・技能（第一の評価項目）の部に属します。ただし、ある概念語が実際に文中でどう用いられるのが適当かを知っているならば、思考力・判断力と直結するとまではいきませんが、それらを用いて書いたり考えたりする思考力（第二の評価項目）と密接に関係してくるはずで、

知識は、通常情報と理論からなる。（中略）
知識はこれまでの経験を説明するのみならず、これからの経験を予期したり、可能的経験を構造的に整理したりするのも役立つ有益なものである。その中には（中略）
概念の力によって、途方もなく我々の可能的経験を拡大してくれるものもある

（田島正樹『文学部という冒険』）
いっぽう論理とは、筋道を立てた思考の組み立て方の形式や法則を言うとして定義されています。思考・判断は、経験則に基づく直感による場合もありますが、論理に添って説明された情報や

判断は妥当性が高いとされます。

二 「水の東西」での、概念と論理とは？

「水の東西」は、水という自然物をどうとらえ、芸術として表現するのかという点での日本と西洋の文化による相違を論じた文章です。水による芸術表現の違いには、水という「もの」の感覚的なとらえ方の違いだけでなく、背後には「もの」を概念化する思考の枠組みの違いがあり、そこに注目する必要があります。

以前、私は「水の東西」について、授業で生徒に次の質問をし、テストで設問を作りました。

「かたちなきものを恐れない心」の反対の「かたちなきものを恐れる心」が西洋にあるとして、その心は「それ自体としてかたちはない」水を、粘土のように造型の対象にする噴水の美学とどう関わっていますか？
この問いは推論を含みますが、西洋思想の知識も前提となります。それは、「造型」の背後にある「存在」のとらえ方、西洋文化の根底にある「観念実在」という概念と論理の知識です。

無限に徒労を繰り返す鹿おどしのリズムが強調する「流れてやまないもの」とは、抽象化すれば転変消滅する無常の相。それを日本人は仏教思想以前に、雲や水という自然の姿に見いだし表現してきました。一方、「造型」とは『日本国語大辞典』によると「ある観念から形のあるものを作り上げること」とあります。西洋において、「造型」の根本にある観念とは何か。それは神による創造の観念、または「イデア」です。ここでは「自然」は「制作」のための単なる素材であり、造型された「かたち」は、素材に秩序を付与するものです。したがって、「かたちがないことを恐れる」としたら、それは混沌や虚無を意味するからでしょう。水の芸術表現の違いは、日本と西洋での存在のとらえ方の根底にある概念の違いにも関わることとなります。同辞典で「消滅」に対する「生成」を引くと、

「静止、不変、存在に対する概念で、物がその状態を変えて、他の状態に変化する過程、或いは非存在が存在となる過程」とあります。

以上の概念の対比を前提に、筆者は水を空間

に静止したかたちに造型する西洋に対し、日本では水に「流れてやまないもの」の相を見、「鹿おどし」のリズムで無限の時間を演出したのだと主張します。西洋という他者像の論理的な把握は、日本文化の理解と、後に学習する文化や思想教材の学習との系統づけを容易にします。

三 観念実在とイデア

『現代文単語』（数研出版）では、「永遠不変のイデア界」という見出しで2ページを割き、「実在」と「イデア」を、こう解説しています。

古来哲学者は、「善」「愛」「正義」といった観念実在を探究したが、なかでも有名なのがプラトンである。彼は現実界の背後にある存在として永遠不変のイデアを据えた。彼の説では、現実界はイデアの影にすぎず、我々が花を見て「美しい」と感じるのは、「美」のイデアが、個々の花に分有されているからだとされる。イデアは我々の前に顕在することがなく、現実界の背後に潜在することになる。

四 美のイデアと暗示の美

ところで、このイデアの概念は、「ミロのヴィーナス」（清岡卓行）で、美とは何かについて理解するときの手がかりとなります。筆者は「美」というものの一つの典型であったヴィーナスが、さらに偶然両腕を失ったことによって

「特殊から普遍への跳躍」を果たしたとしています。「普遍と特殊」の対比自体が、プラトンの「天上の秩序」への志向かと見えます。しかし、その普遍とは、偶然にも具体的な両腕を失うことで、人々が可能なあらゆる手を夢見るようになったことによる全体性の謂だとします。

このイロニーを指摘する思索は、完璧な美のイデアの実在を確信する論理とは対極の、欠落や無によってこそ無限定な美への夢が誘われ、美とは暗示が生む生命の夢の中にあるとする逆説です。

五 概念実在論から唯名論への転回

丸山真男の、『である』ことと『すること』でも「概念実在」論が、「近代社会における制度の考え方」の節で、取り上げられています。身分制度を打破し、概念実在論を唯名論に転回させ、「先天的」に通用していた權威にたいして、現実的な機能と効用を「問う」近代精神のダイナミクス：

「唯名論」は数社の「現代の国語」の教科書で掲載されている「ものごとくば」（鈴木孝夫）で、本文のカギとなる用語として登場しています。言語論の文脈では「言語論的転回」による、言葉が世界を分節化するという考え方であり、「実念論」と対比して紹介されています。『である』こと」の文脈では、個物は普遍に関与することで始めて存在する（ブディングの例で

は、属性として内在する味によってブディングである」という概念実在論から、概念は名目に過ぎず経験が先行するとする歴史的な価値転回として触れられています。

六 二項対立を相対化する視点

以上のように、評論文学習では概念間の関連に注目し、それらのつながりが星座のように見渡せれば、概念語がどのように文章に用いられ、「論理」を構成しているかを学べるでしょう。

「ミロのヴィーナス」の「特殊から普遍へ」という二項対比の論理も、詩人がこの像に触れたときの想像が、イデア論と対比されることで生まれたものだ、と相対化することができます。新学習指導要領で目指される思考・判断では、場面状況に応じて様々なものや概念をつなげ、構造化する論理活用力が挙げられています。概念語による二項対比などの活用で、論理力を鍛えるとともに、多様な外部との対話的思考が、同一化を防ぎ価値創造へとつながるのでしょう。

概念語は現実のある側面を要約的にとらえ、分析・批判の武器となります。但し、その二項対立的運用がしばしば善悪二元論や一元論に傾き、異質な情報を排除しイデオロギー化する危険性があります。他者の言葉の使用を分析し、再定義を繰り返す対話的な思考が必要なのではない。

（参考文献）木田元『反哲学入門』新潮文庫